立教大学学術推進特別重点資金（立教ＳＦＲ）
大学院生研究
２０１３年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院 文学研究科 英米文学専攻		
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年	氏　名	
	文学研究科英米文学専攻 博士課程後期課程 4 年	小笠原　清香　　印	
指導教員	所属･職名	氏　名	
	文学研究科・教授	菊池　清明　　印	
自然・人文・社会の別	人文	**個人・共同の別**	個人
研究課題名	強意副詞の脱語彙化とその後の展開：強意から迅速への意味変化		
研究組織	在籍研究科・専攻・学年	氏　名	
	文学研究科英米文学専攻 博士課程後期課程 4 年	小笠原　清香	
研究期間	2013　　年度		
研究経費	（支出金額）　199 千円　／（採択金額）　200 千円		

研究の概要（200～300 字で記入、図･グラフ等は使用しないこと。）

従来、強意副詞の意味変化については、具体的語彙から強意語への文法化および脱語彙化のプロセスが観察されてきたが、本研究ではいくつかの強意副詞において文法化の後にまた語彙的意味が発達する現象に着目し、文法化の後にまた語彙化が起きていることを主張する。強意副詞 *swithe* と *fast* の意味変化に着目し、これらの語が強意語としての流行の後、迅速の意味を発達させているという史実から、強意語は「速く」という速度を表す意味へと変化する意味変化の特質を持つことを論じ、強意語が再び語彙的意味を派生させているという点で、一般的に主張されるものとは逆方向の変化が観察されることを示す。

キーワード（研究内容をよく表しているものを３項目以内で記入。）

〔　英語強意副詞　〕〔　意味変化　〕〔　文法化　〕

研究成果の概要（図･グラフ等は使用しないこと。）

1. 研究背景・概要

これまで強意副詞は文法化のプロセスをたどる事例として多くの研究がなされてきた。ここで主張されてきたことは、本来の語彙的意味が希薄化し、次第に文法的役割を担うようになるという、内容語から機能語への変化である（Sinclair 1992, Partington 1993, Lorenz 2002)。このように強意語は近年では文法化・脱語彙化を経験するものとして盛んに研究が行われてきた。しかしその際、強意語は形容詞・副詞修飾に限定され、動詞修飾の事例に目を向けられることはなかった。強意語の定義は研究者により異なり、Quirk et al (1985) では、意味特質により強意語を捉えている。ここでは強意語は、形容詞・副詞以外の文の構成要素に対しても修飾する機能を持ち、広範な語彙範疇を構築する。本研究は、これまで詳細に論じられることはなかった動詞修飾の機能を持つ強意副詞に着目することで、従来主張されてきた具体的語彙から強意語への、文法化・脱語彙化といった変化とは逆の、強意語から具体的語彙への変化が存在することを主張するものである。

2. 強意副詞とその語彙クラスについて

強意語が属する文法カテゴリーや、その語彙クラスに関しては、これまでにも様々な議論がなされてきたが一貫した定義づけはされていない。Partington (1993), Lorenz (2002) をはじめとし、 強意語の機能は厳密に規定すると形容詞修飾にあるとする見解もある一方で、Allerton (1987) が指摘するように、実際には *very* や *too* などの主に形容詞修飾の機能を持つ強意語は限られており、*absolutely, entirely, rather, slightly* など、形容詞（副詞）に加え、動詞修飾の機能を持つ語が多い。このような背景から Allerton (1987) では、強意語は、「語彙文法カテゴリー (lexico-grammatical category)」 であると説明され、これに属する二つの下位範疇として、形容詞修飾と動詞修飾の強意語があると定義している。

これらの先行研究による見解を踏まえた上で、本研究では、これまで形容詞修飾の強意語と比較すると、中心的議論からは外されてきた動詞修飾を含む副詞の文法的役割に合致する性質を持つものを、強意副詞と定義した。また、Quirk et al. (1985) をはじめとし、高低に関わらず程度を表すものを強意語と定義する見解もあるが、本研究においては、程度の高さを指し示すものに限定した。

3. 研究成果

3.1 ヘルシンキコーパスを用いた *fast* の意味変化の調査

Helsinki Corpus における共起動詞の観察を通して *fast* の ME から EModE にかけての支配的な意味の変動を見た。[1]

'firmly' と分類したものは、*hold*, *sit*, *stand*, *bind* などの *fast* との共起の結果、指し示される状態が固定・密着を表すようになる動詞である。'rapidly/quickly' に分類した用例は、二つの共起動詞のパターンがある。一つ目は、迅速の概念を含む *hien* (to go quickly) や *sheten* (to haste) といった動詞との共起の結果、動詞の様態に含まれる迅速の意味をより強化していると考えられるパターンであり、二つ目は、*rennen* (to run), *gon* (to go) など動詞の意味に迅速の様態が含まれなくても、強意副詞 *fast* との共起により迅速の意味が生まれるものである。また、強意用法として分類した用例は、*hope*, *wonder* などの心理動詞によって表される心的態度を強めていると考えられるもの、また *eat*, *sleep*, *weep* などの動作動詞を *fast* が修飾することで、動作の強度や行為の連続性が示されるものである。'close' という意味に分類した用例は、*fast by*, *fast beside* といった連語表現で表れているものである。

研究成果の概要　つづき

fast の強意副詞としての用法は M2 では ‘firmly’ の語義に続き２番目に多い。M3 では最も頻度の高い語義は ‘rapidly’ へと移り変わり、強意用法も迅速の語義に続き高頻度に現れている。

強意副詞としての用例は M4 にかけて次第に減少し、E3 では完全に消失している。通時的に意味変化の動きを見ると、強意語としての用法はその他の ‘close, soon’ といった語義と共に近代英語にむけて衰退にむかうのに対し、原義である ‘firmly’ はどの期間も一定の頻度を保ち、‘rapidly’ の語義に関しては E3 では *fast* の最も頻度の高い語義へと上り詰めたことが分かった。

3.2 ヘルシンキコーパスを用いた fast の共起動詞の観察

共起動詞に関しては、動詞のタイプ数が最も多いのが M2 の強意用法であり、*crien* (to cry), *slepen* (to sleep), *bispeaken* (to speak out) などの動作動詞との共起し、その行為の連続性を表すもの、また *fighten (to fight)*, *defenden* (to defend) などの動詞の様態に対し、動作に強度を付与する働きをする例が多い。この強意副詞として解釈できる心理動詞や動作の結果が固定・密着に繋がらない動作動詞は M２をピークに、E2 まで表れているが、E3 になると消失している。これとは対照的な現象は、様態に迅速の概念を含む動詞、または *fast* と共起することで迅速の意味を表すようになる移動動詞のタイプが M3 で増加したことである。

さらに M4 からの *as fast as* のコロケーションの出現は、‘rapidly’ の意味が *fast* に定着したことを最も鮮明に表している。このコロケーションは E3 では 7 例あり、この時期の用例では強意副詞として *fast* が機能していると考えられる用例が抽出されないため、強意から迅速へと語義が変化したことがわかる。変化が最も少ないのが、‘firmly’ の語義に解釈できる動詞のタイプであり、*bind*, *hold* はどの時期にも現れ、‘firmly’ の語義は現代英語まで残る意味となった。

3.2 文法化・語彙化

動詞修飾の事例に焦点をあて、共起動詞の観察から文法化・語彙化を考察した。動詞修飾の働きを持つ強意副詞の振る舞いや意味変化については、これまで強意語 (intensifier) とは別に、様態副詞 (manner adverb) としてカテゴライズされることで、詳細に論じられることはなかった。しかし、強意から迅速への意味変化は、*swithe* や *fast* など、本来 ‘strongly, firmly, vigorously’ などの意味で動作に強度を付与する働きのある副詞に内在的な変化の性質と言える。この意味変化には、二つの経緯が想定される。一つ目は、迅速の概念を含まない動詞であっても、強度が付与されることで、動作に連続性が生まれ、迅速へと意味が拡張する場合、二つ目は速さのスケールが内包される動詞が強意副詞と共起すると、より速い状態が指し示される場合である。強意副詞の意味変化については、本来の具体的語彙から強意語へという、具象から抽象の意味変化の流れが主張されてきたが、強意からさらに ‘rapidly’ という語彙的意味が定着するパターンがある。今後より多くの副詞の通時的意味変化を考察する必要があるが、強意副詞は文法化・脱語彙化に終わらず、再び語彙的意味を定着させるという意味変化の一つの傾向を本研究では示した。

[1] ヘルシンキコーパスの時代区分と統計については以下を参照。O1 (-850), 2,190 words; O2 (850-950), 92,050 words; O3 (950-1050), 251,630 words; O4 (1050-1150), 67,380 words; M1 (1150-1250), 113,010 words; M2 (1250-1350), 97,480 words; M3 (1350-1420), 184,230 words; M4 (1420- 1500), 213,850 words; E1 (1500-1570), 190,160 words, E2 (1570-1640), 189800 words; E3 (1640-1710), 171040 words.

研究発表（研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。）

①雑誌論文（著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ）
②図書（著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数）
③シンポジウム・公開講演会等の開催（会名、開催日、開催場所）
④その他（学会発表、研究報告書の印刷等）

①雑誌論文

1. 小笠原清香「強意副詞の脱語彙化と語彙化―*swithe* と *fast* の場合―」『英米文学』73, 2013 年 3 月, 25-44 頁

2. 小笠原清香「英語副詞の通時的意味変化に見られる放射状パターンとその認知的制約」『日本認知言語学会論文集』13, 2013 年 5 月, 86-95 頁

3. 小笠原清香「共起関係からみる強意副詞の意味変化」(Workshop Report『構文的意味の諸相: その境界線 を越えて』). JELS (『日本英語学会第 31 回大会・国際春期フォーラム第 6 回大会研究発表論文集』) 31, 2014 年 2 月, 273-274 頁

②学会発表

1. 小笠原清香「意味変化における一方向性の再考―英語強意副詞の脱語彙化とその後の展開―」日本認知言語学会第 14 回全国大会, 9 月 22 日, 於京都外国語大学

2. 小笠原清香「共起関係からみる強意副詞の意味変化」『構文的意味の諸相：その境界線を越えて』第 31 回日本英語学会スチューデントワークショップ, 2013 年 11 月 9 日, 於福岡大学

3. 小笠原清香「動詞の段階性と強意副詞：中英語から現代英語にかけての fast の意味変化」2013 年度立教英米文学会, 12 月 21 日, 於立教大学池袋キャンパス